（様式１）

令和７年度　学力向上指導改善プラン

学校教育目標『仲良く 元気に がんばる子』

目指す子どもの姿 自らをみがき 未来をひらく こころ豊かな児童の育成

変容を目指す資質・能力　ａ知識及び技能　ｂ思考力、判断力、表現力等　ｃ学びにむかう力、人間性等　ｄ情報活用能力
ｅ課題解決能力　ｆ学び続ける姿勢　ｇコミュニケーション能力

三田市立学園小学校
学校長　乙訓和之
研究主体【管理職と研究推進担当、学校改革推進委員を中心に学力向上委員会を設置】

前年度			継続性	4月（※全国学力・学習状況調査の結果などを受けて年度途中で変更する場合は削除、追記部分を朱字で修正）			2～3月 年度末評価		
学力向上に向けた重点的な目標	年度末評価（前年度の成果と次年度に向けた課題等）	評価		学力向上に向けた重点的な目標（変容を目指す資質・能力）	成果となる目標（指標となる数値等）	具体的な行動目標（成果目標達成のための具体的な手立て等）	教員評価	（今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
○基礎・基本の育成を図り、学習意欲を高める。	○学力テストの質問「国語の内容はよく分かる」のプラス評は、89．4%で全国平均を上回っている。 ◆学力テストの質問「算数の内容はよく分かる」のプラス評は、73．7%で全国平均を下回っている。 ○学校評価児童アンケートにおいて「学習の内容がわかりますか」のプラス評価は、94%であった。また、保護者アンケートでは、87%のプラス評価をいただいた。 ○学力テストで算数の正答率は、全国平均とほぼ同等であった。その中で、数と計算領域や図形領域は、正答率が高かった。 ◆学力テストで国語の正答率は、全国平均を下回っている。その中で漢字や文法等の基礎的な問題は、ある程度できていた。 ◆国語においては、子どもたちが教材に興味を持ち、分かりやすい授業づくりを意識している。漢字の習熟にも力を入れ、一定の成果を上げている。しかし、児童の語彙力は不十分である。読書量を増やす取り組みや、文章を書く機会を増やす取り組みがさらに必要である。 ○算数においては、継続して取り組んでいる朝学習の成果が表れ、基礎の力は定着しつつある。今後は、考え方を記述したり、説明したりすることで、基礎的な力を使いこなせるようにしていきたい。	B	→	○基礎・基本の育成を図り、学習意欲を高める。 （a・c・f）	○国語の言語事項面で、9割以上の定着をめざす。 ○算数の知識技能面で、9割以上の定着をめざす。 ○学力テストのアンケートで「算数・国語の学習は分かりやすい」と答える児童が８５％以上になるようめざす。 ○学校評価アンケートの学習に関する項目で肯定的評価が８５％以上になるようめざす。	○学習スタイルを確立する。 （明確なめあてとめあてに沿ったふり返り・学びの軌跡がよく分かるノート作り） ○朝学習を継続して行い、計算力の向上を図る。 ○漢字や計算の定着度をこまめに評価し、補充学習や再テストにより習熟を図る。 ○授業の中に互いの意見を出し合う機会を設け、意見を交わし合うことで学習理解が深まる場面を設定する。 ○放課後学習や個々の課題に応じた家庭学習や朝学習等、個別学習をエ夫する。 ○支援の必要な児童に、学習サポート体制を整備する。 （指導補助員、がんばりタイム指導員、特別支援アシスタント等の活用・教材教具の工夫） ○視覚支援や導入を工夫し、わかりやすく興味を持てる授業づくりを意識する。			
○思考力・判断力・表現力を高める。	◆学力テストで特に、国語の思考力・判断力・表現力を問う問題の正答率が低く、全国平均を大きく下回った。 ◆要点を整理することや自分の考えをまとめることに課題がある。また、話し合い活動を充実させていくことも課題である。 ◆資料やグラフから多面的に読み取り、読み取ったことを基に思考を進めるような活動を多く取り入れることが必要である。 ◆論理的に話したり書いたりすることと、思考力が身につく授業づくりを意識することはまだまだ弱いので、より一層取り組んでいく必要がある。 ○高学年が宿泊行事で学んだことを他学年に発表したり、学年間や一つ下の学年に学んだことを伝えたり、保護者に向けて発表したりする機会を設けている。それをフィードバックして、さらに思考を深めていけるように取り組んでいきたい。	B	→	○思考力・判断力・表現力を高める。 （b・d・e）	○学力テストの読解力や思考力を問う問題で、全国平均を上回ることをめざす。 ○各教科の単元テストの思考力・判断力・表現力を問う問題で、正答率8割以上をめざす。 ○学んだことを自学年以外に発表する機会を昨年度より増やす。	○様々な教科で、自分の考えが持てるように思考する時間を確保し、理由を明確にして記述する場面を取り入れる。 ○論理的に話したり書いたりできるように、話し方や書き方の基本の型を練習する。 ○ワークシートやノートに自らの考えや友達の考えなどを書き、学びの足あとを残すようにする。 ○めあてに対してふり返りを書き、身についた学びを意識できるようにする。 ○思考力が身につく授業づくりを意識する。（比較・分類・要約・取捨選択・推論・関連付け等） ○ペアトーク・グループトーク・全体交流を組み合わせて学び合いを意識し、多様な考え方を身につけられるようにする。 ○総合的な学習等体験的な学習や問題解決的な学習を積極的に取り入れ、異学年交流や地域の方との交流を図り、身につけた力の活用の場を設定する。 ○資料やグラフから多面的に読み取り、読み取ったことを基に思考を進めるような活動を多く取り入れる。			
○道徳科の研究を基に、豊かな心の育成を図り、主体的で対話的な学びづくりを推進する。	○人権教育と道徳科研究のテーマを統一して、一人ひとりを大切にする取り組みを進めた。 ○研究推進委員会が中心となり、道徳科の研究授業として全クラスでの研究授業を実施した。また、11月には、道徳科の研究発表会を実施し、研究の成果は、研究紀要にまとめた。 ○道徳科の研究において、講師の先生から学ぶ機会を多く持つことができた。また、課題教育に対しての校内研修を計画的に進めた。 ○学校評価アンケート（職員）の人権教育の4項目では、100%の肯定的評価を得た。 ○学校評価アンケート（保護者・児童）の人権意識を問う項目で、95%の肯定的評価を得た。しかし、それに安心することなく、5%のマイナス評価に光を当てて取り組みを進めていく必要がある。	A	→	○道徳科の研究を基に、豊かな心の育成を図り、主体的で対話的な学びづくりを推進する。 （b・c・g）	○学校評価アンケート（職員）の人権教育の4項目での肯定的評価が90%以上になることをめざす。 ○学校評価アンケート（保護者・児童）の人権意識を問う項目で、肯定的評価が90%以上になることをめざす。 ○教職員間で交流した授業実践や今年度の研究の成果と課題を冊子としてまとめる。	○道徳的価値への意識の向上と学びを日常生活につなぐ教育活動の実践に取り組む。 ○講師を招いた校内研修会・エピソードシートの交流等を行う。 ○全クラスで道徳の校内研究授業を行う。 ○事前・事後研修会を持ち、成果と課題を明確にし、教職員で共有する。 ○11月に研究発表会を実施する。 ○各学年、各クラスの取り組みを交流する機会を多く持つ。 ○ちがいを認め合うことで、多様な考え方を身につけることにつなげていく。 ○授業実践や研究の成果と課題を冊子としてまとめ、教職員間で共有し、活用する。 ○課題教育に対しての校内研修の充実を図る。			
○読書活動を推進し、本に親しむ子の育成を図る	○学校評価アンケート（児童）の読書に対する肯定的意識は、ほぼ昨年度と同等であった。(79%＋2%)また、職員アンケートでは、読書指導に対する取り組みの肯定的評価が100%となった。 ○今年度の図書室での貸出冊数の合計は、昨年度より25%増えている。 ○学校司書と連携し、学年文庫やおすすめの本の紹介が充実した。 ○市立図書館と連携し「ひだまり号」の活用ができた。 ○朝読書や隙間読書の機会を活用して、読書時間の確保に努めた。また、図書委員会の活動や、全校朝会における学校長の話の中で、読書の意欲を高める啓発を行った。 ◆読書活動を言語活動に結びつけ、思考力・判断力・表現力の向上につなげることは、今後の課題である。 ◆毎月の学園読書の日を充実させる取り組みをもっと考える必要がある。	B	↗↘	○ICT機器を有効に活用した授業改善に取り組む。 （a・d・e）	○アンケートのPC・タブレットなどICT機器に関する質問の肯定的評価を昨年度より向上させる。 ○学年ごとに身につけるべきタブレット活用力のカリキュラムを確立させる。 ○情報モラル・ネットリテラシーの教育についてのカリキュラムを確立させる。	○ICTを活用した授業実践に取り組み、効果的な活用法を検討していく。 ○タブレットの使用頻度（家庭学習及び授業）を昨年度よりあげる。 ○情報モラル・ネットリテラシーについての講演会等の機会を持ち、児童・保護者・職員への啓発により意識を高める。 ○学年ごとに身につけるべきタブレット活用力の系統表に則って指導と総括を行い、カリキュラムを確立させていく。 ○情報モラル・ネットリテラシーの教育についての系統表に則って指導と総括を行い、カリキュラムを確立させていく。			
○ICT機器を有効に活用した授業改善に取り組む。	◆学力テスト質問紙のICT機器の使用頻度を問う質問に対して、全国平均より低い傾向にあった。 ○タブレットの持ち帰り回数やミライシードの使用頻度は、昨年度より増加している。また、授業の中で効果を考えながら、タブレットや情報機器を積極的に使っている。 ◆学年ごとに身につけるべきタブレット活用力の系統が曖昧であったので、カリキュラムを確立させていく必要がある。 ◆情報モラル・ネットリテラシーの教育について、講演会等で1年生から学ぶ機会を設けているが、単発で終わらずカリキュラムを整備して、系統立てて指導していく必要がある。	B		○読書活動を推進し、本に親しむ子の育成を図る。 （a・c・d）	○アンケートの読書に関する質問の児童の肯定的回答を昨年度より向上させる。 ○図書室の利用率と読書通帳の達成率を昨年度より向上させる。	○朝読書タイムや隙間読書の時間等を通して、読書の習慣の定着を図るとともに、語彙力の向上につなげていく。 ○学年の発達段階に応じた図書を学年フロアの本棚に入れて、積極的に利用する。 ○学校司書と連携して、授業の中で図書資料を活用する。 ○言語活動に本のポップや本の帯づくり・ブックトーク・ビブリオバトル等を取り入れる。 ○「ひだまり号」の活用等、市立図書館とも連携していく。 ○毎月23日の学園読書の日の啓発をしていく。			
○家庭や地域との連携及び小中一貫教育の推進を図る。	○保護者アンケートの「開かれた学校・地域や保護者との連携」のすべての項目において、前年度より良い肯定的評価をいただいた。(5項目95%以上) ○児童アンケートの生活習慣・規範意識の項目では、昨年度と変わらず肯定的評価の高い値を維持できていた。 ○児童や保護者のニーズに対して丁寧な対応を心がけ、チームの中で情報共有して対応しようと意識できている。 ○中学校や保育所・幼稚園とは、今まで通り児童生徒の様子を密に交流している。 ◆小中一貫教育推進については、各部会ごとの交流にとどまり、校内で情報共有していくことがやや少ない。 ◆外部人材の活用としては、企業や行政・公共施設等の協力を得て、充実した学習を進める機会を持っている。ただ、学校支援ボランティアと連携した授業づくりはあまり多くない現状がある。もっと地域人材の協力を仰いでいってもよいのではないかと思う。学校ボランティアの活用推進と体制の構築を継続して進めていく。	B	→	○家庭や地域との連携及び小中一貫教育の推進を図る。 （c・f）	○保護者アンケートの「開かれた学校・地域や保護者との連携」項目において、肯定的評価を高い値で維持する。 ○児童アンケートの生活習慣・規範意識の肯定的評価を高い値で維持する。	○学校評価アンケートを実施する。また、その結果による成果と課題等を保護者や地域に公表し共有する。 ○学校だよりを始め、保健だより、学年通信などを定期的に発信する。 ○参観懇談・行事の機会や日々の連絡を密にすることで、保護者との連携を図る。また、学びの発表の場を増やす。 ○学年に応じた家庭学習の方法や時間を提示し、家庭での学習習慣の確立を図る。 ○コミュニティスクールの推進のため、学校運営協議会を年間通して定期的に開催する。 ○積極的に外部人材を活用した授業づくりや学校支援ボランティアと連携した授業の工夫を推進する。 ○中学校区内の4校や保育所・幼稚園と児童生徒の様子の交流や授業参観を行い、円滑な接続を図る。 ○小中一貫教育推進委員会（各分科会）を通し、カリキュラムの作成等より密な中学校区での交流を図る。			

○「教員評価」は教員対象に実施した自己点検調査結果
（0～4の5段階評価）の平均値
○「評価」は年間の取組みについて、4段階で評価
A・・・十分に達成　B・・・おおよそ達成
C・・・達成が不十分　D・・・ほとんど達成できず